

トピックス

# 新たに発見された「お年玉付き年賀はがきの見本」

富永 紀子

お年玉付き年賀はがきは、「お年玉付き郵便はがき等の発売に関する法律」に基づいて、昭和24（1949）年12月1日、新しい試みとして昭和25年の年賀用として発行された。内訳は2円の通常はがき3000万枚と、中央共同募金委員会・日本赤十字募金委員会に対する寄付金1円を付けたもの1億5000万枚である。

この新しい試みである「お年玉付き年賀はがき」を考案したのは、京都に住み大阪・心齋橋で英国物を取り扱っている仕立て屋を経営する林正治（はやしまさじ）氏（当時42歳）であった。

年賀はがき発行半年前の6月、「終戦後、うちひしがれた状態の中で通信が途絶えた。年賀状が復活すればお互いの消息が分かるのに。それにくじのお年玉をつけ、更に寄附金を加えれば夢もあり、社会福祉のためにもなる」と思いついたのがきっかけであった。

林氏はまず、大阪の郵政局に行き、郵政大臣への紹介状をもらおうと7月に上京し、郵政大臣より郵務局長を紹介された。

郵政審議会において、この提案は「面白い案だが日本は今、疲弊して食べるものも食べられない時代、送った相手にクジが当たるなんて、そんなのんびりしたことができる状態ではないでしょう」と、時期尚早といった意見も強かったが、曲折を経た末、世界で初めてのくじ付きの郵便物という制度が創設された。

因みに郵政審議会への諮問は、くじによるお年玉の贈与先を、1案では受取人に、2案では受取人と購入者双方にと、併記してあった。購入者に贈る場合は、はがき数に応じたくじの交付を考えていたようである。

世界で初めてのお年玉付き年賀はがき発行のその背景には、郵政省の懐事情も関係していたようである。

戦後、日本の郵便事業は、戦争のもたらした被害が甚大で、その復旧に莫大な資金を必要としたが、郵便利用の低調もあって郵便事業経営は赤字に悩み、この赤字を克服するのが急務であった。そのため、郵便による通信量を増大することが望まれ、その呼び水として年賀状の差し出しを積極的に推奨することになったのである。

林氏はただの思い付きで上京したのではなく、プレゼン資料として、見本のはがきや宣伝用のポスター、お年玉の賞品の案等、具体的なものも携えていた。



図1 お年玉付き年賀はがき見本

図1は林氏の作ったお年玉付き年賀はがきの見本である。ここにはくじ番号や売り出し期間、賞品の受け取り方等が記述されている。

そして、実際に郵政省より発行された年賀はがきは図2のとおりである。

お年玉付き年賀はがきの発行情が決まると、その発売に向け急ピッチで準備が進められたが、林氏もこの間、何もしなかった訳ではない。

自費で、各方面にお年玉付き年賀はがきの発行を知らせる挨拶状を送付しているのである(図3)。

余談ではあるが、この時、林氏は郵政省郵政審議会の専門委員に任命されている。

また、8月には大阪郵政局でお年玉付き年賀はがきの申込書を作成している(図4・図5)。記載が8月となっていることから、林氏の持ち込みから異例のスピードである。



図2 最初のお年玉付き年賀はがき(昭和25年用)

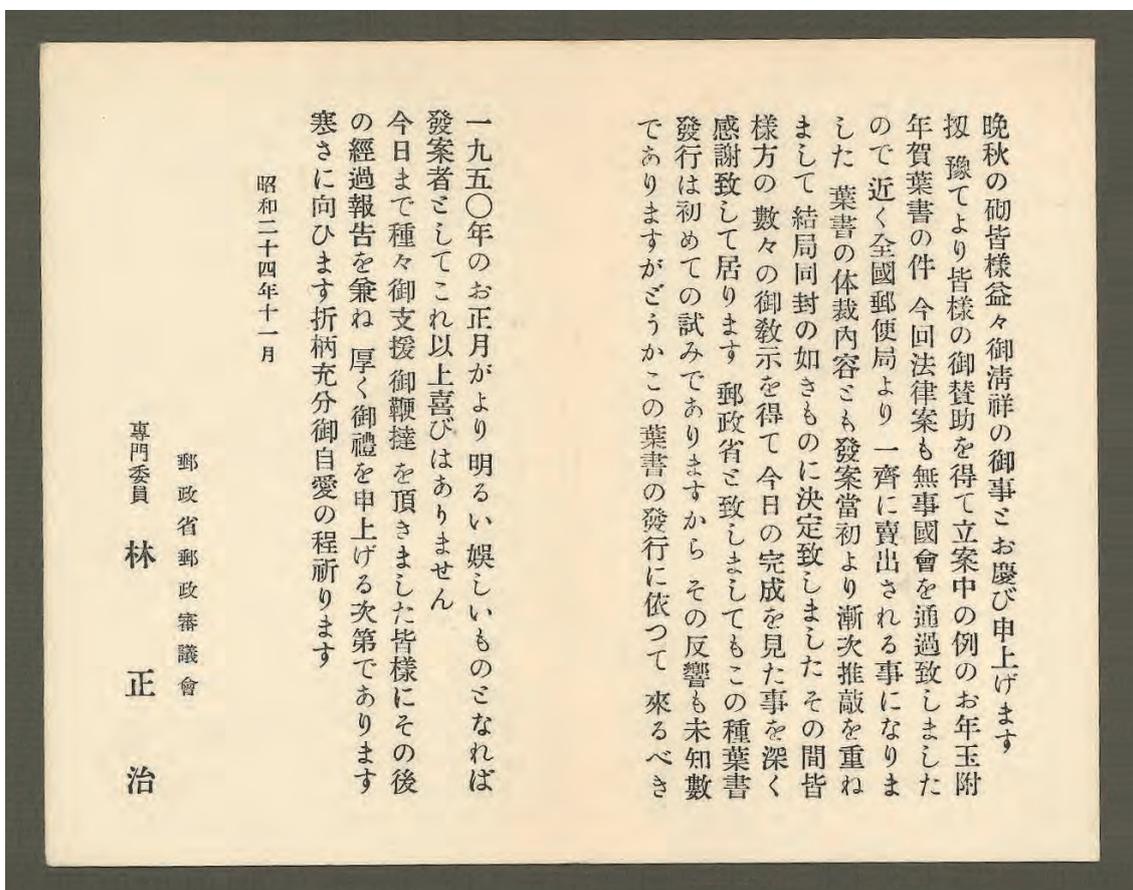


図3 お年玉付き年賀はがきの発売を知らせる挨拶状

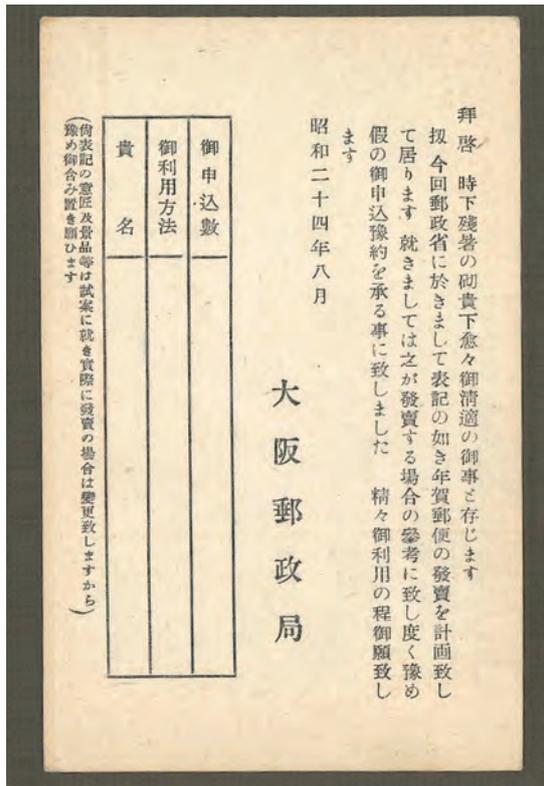


図4 お年玉付き年賀はがき申込書（表面）

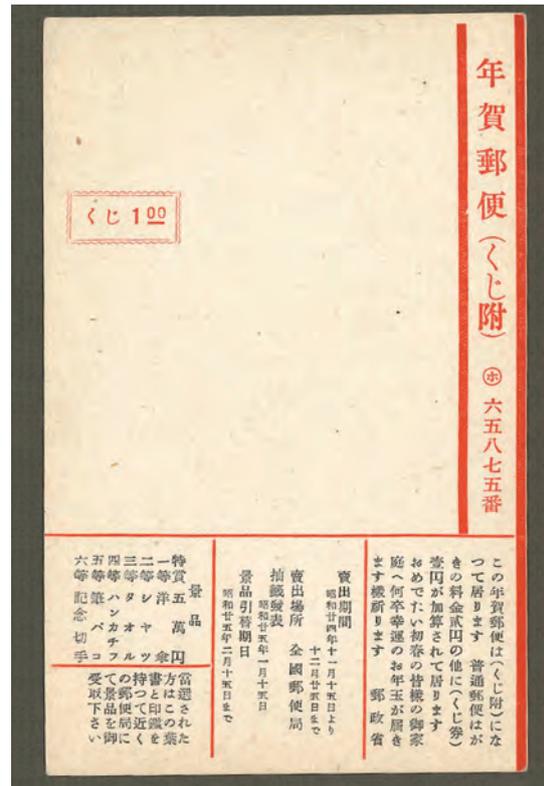


図5 お年玉付き年賀はがき申込書（裏面）

年賀はがきの初年度の販売数は微々たるものであり、林氏は多数の売れ残りを買取ったという話も残っている。

林氏のプレゼン資料には、お年玉付き年賀はがきの宣伝ポスター案もある（図6・図7）。

図6はかなり具体的で、発売期間や抽選発表日が記入されているほか、はがきの値段や特賞50万円、1等ミシンといった賞品まである。

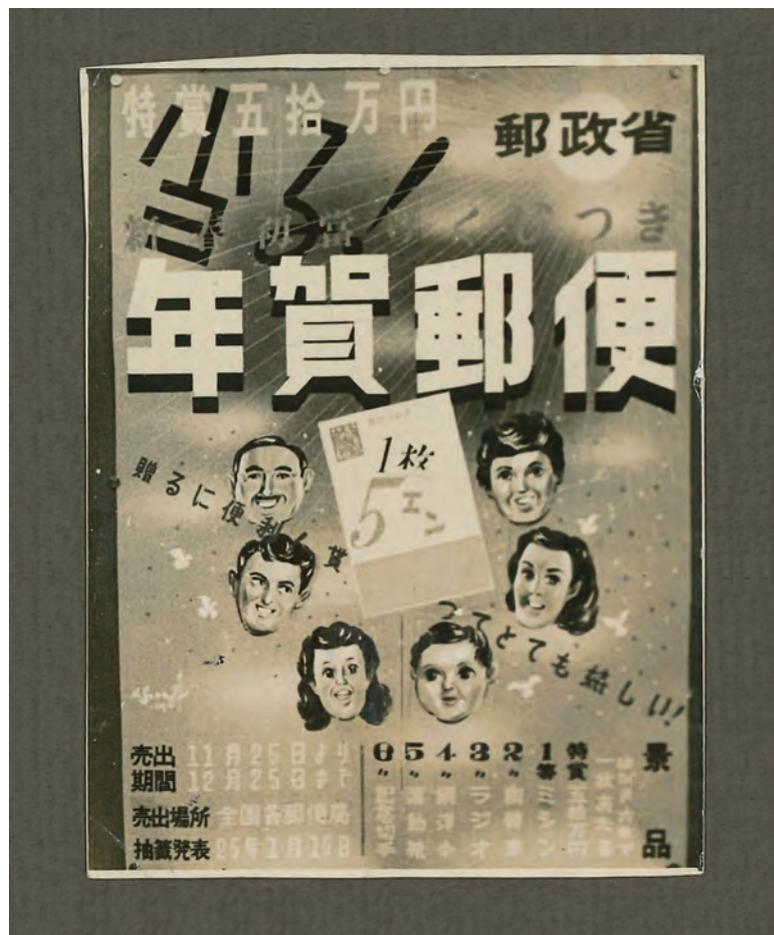


図6 宣伝ポスター案

図7はかなり抽象的ではあるが、ここで、当館が所蔵している昭和25年用のお年玉付き年賀はがきの宣伝ポスターの1つに、図7とよく似たものがある(図8)。これは林氏のデザイン案が元になっているのではなかろうかと考えられる。

後年、林氏は雑誌のインタビューで「お年玉年賀はがきが、こんなにまで続くとはねえ。物のない2、3年のことと考えていましたよ」と語っている。

携帯やスマートホンが普及し、メールやLINEが多く使われるようになった今日でも、新年のあいさつはやはり年賀状が主役である。

その「最初の見本となったはがき」が、林氏の次男 正史氏より年賀イノベーション研究会 高尾氏の元に届き、今回日の目を見たのである。



図7 宣伝ポスター案



図8 お年玉付き年賀はがきの宣伝用ポスター  
(昭和25年用)

(付記) 今年度の年賀状展で、これらの資料をお貸しくださり、かつ、小稿を記すにあたり、御協力及び掲載を快諾して下さった高尾均氏(年賀イノベーション研究会)に対し、この場を借りて御礼申し上げます。

#### 【参考文献】

林みのる『童夢へ』幻冬舎、2009年  
『サンデー毎日』1987年1月4・11日  
合併号、毎日新聞社

(とみなが のりこ  
郵政博物館 学芸員)